

”挑戦”の先に 見えるもの

「“挑戦”の先に見えるもの」は、瀬戸内国際芸術祭に関わる人たちの姿に光をあて、その挑戦の歩みをたどる連載企画です。



なぜ、私たちはこの企画に挑むのか

日本総陞はこれまで、法人向けのリスクマネジメント事業に取り組んできました。その本質は、「挑戦する心を止めずに、安心して一步を踏み出せる環境をつくる」ことだと考えています。

私たちが向き合っているのは、リスクそのものではなく、その先にある“挑戦”です。誰かが前に進もうとする姿に、私たち自身も力をもらってきました。

挑戦を応援する会社として、その現場で生まれる物語を社会に届けていきたい——そんな思いから、この企画を始めました。

瀬戸内国際芸術祭の会場でも、アートに関わる人、島で暮らす人、遠くから訪れる人など、それぞれが自分の想いを胸に、“挑戦”しています。私たちは、作品そのものではなく、その背景で動いている“人”の挑戦に目を向け、現場で出会った“挑戦する人”たちの日常や気持ちを、記録し伝えていきます。

シリーズ第7回となる今回は、瀬戸内海に面した港町・宇多津（うたづ）エリアからお届けします。宇多津エリアも、2025年の瀬戸内国際芸術祭（以下、芸術祭）で初めて開催エリアに加わりました。温暖で雨が少なく、晴れの日が多いこの土地は、かつて海岸線のほとんどが塩田に変わるほど「入浜式塩田」による塩づくりが盛んで、全国でも有数の塩の生産地として知られていました。

塩田が廃止されたあとも、町では塩づくりの記憶を受け継ぎ取り組みが続いています。入浜式塩田の復元や塩作り体験施設が整備されるなど、地域の誇りとしてその歴史が語り継がれつつ、塩田跡地の開発により生まれ変わった臨海部は、商業施設や観光拠点としてもにぎわいを見せています。

そこから少し内陸に位置する古街エリアには、由緒ある神社や仏閣、風情ある町家が点在し、景色を見渡しながら歩くだけでもどこか懐かしい時間が流れます。

“古き良き情景”と“新しい暮らし”が見事に溶け合う町並みの中で、心地よい温かさが日常に息づいています。



実は香川県内で最も小さな自治体でありながら、子育て世代にやさしい政策や町全体での支え合いの文化が根つき、今では人口・出生率ともに県内トップクラスを誇る宇多津エリア。

暮らしやすさだけでなく、まち全体に“文化を大切にする気風”が息づいているのも、この町の魅力です。

■芸術祭が映し出す、“塩の町”の記憶

そんな宇多津エリアが、芸術祭をきっかけに“塩の町”としての記憶を再び輝かせていました。

塩や海をテーマにした多彩な作品が展示され、その多くが「時間」や「変化」を静かに語りかけるような表現でした。どの作品も、小さな塩の一粒一粒が積み重なって風景を変えていくようなスケール感を持ち、自然と人の営みが重なり合う宇多津の姿を思わせます。

芸術祭を通して浮かび上がったのは、かつて塩づくりで栄えた町の記憶と、今もこの土地に流れ続ける“つながり”の温度。町そのものが、まるでひとつの作品のように感じられました。



■“みんなでやる”町の力

宇多津エリアでは芸術祭に合わせて、地域内の飲食店や施設を対象とした「スタンプラリー企画」を開催。7つのスタンプを集めると応募できるこの企画の対象店として、なんと57店舗が参加。

「私も入る!」「私も!」と声を上げる人たちが次々に集まり、町全体がひとつになって盛り上がりつつあります。

また、来訪者向けに配布された特別編集の観光ガイドブック『るるぶ宇多津町』も、宇多津らしい温もりを感じさせる取り組みのひとつです。

地元商店や飲食店、観光名所を紹介しながら、町を楽しむモデルコースが掲載されています。（るるぶの内容が気になる方は、こちらからご覧いただけます!→<https://x.gd/zJ5PW>）

こうした活動の根底にあるのは、“誰かが始めたら、みんなで支える”という町の文化。何かをやると決めたら、自然と人が集まり、動き出す——それが宇多津という町の強さであり、温かさでもあります。

「何かやるとなったらみんなが一緒になる。こういう団結力が宇多津の一番の良いところじゃないと思うよ」

そう教えてくれたのが、今回の主人公である「前田精肉店」の女将さんです。

■宇多津で生きる「前田精肉店」が見つめる、町の絆と未来

古街エリアの一角にある前田精肉店。芸術祭のパンフレットにも掲載されているお店です。芸術祭に訪れた人たちが次々に立ち寄り、私もお邪魔してみることになりました。

入口の扉を開けると、カウンター越しに「いらっしやい!」と明るい声が響きます。その声の主が、町の人たちに長く愛され続けている女将さん。

町の人々とともに歩んできた年月の中で、宇多津の“変化と成長”を間近で見つめてきました。

「宇多津は、町長さんが住んでる人たちの声を聞こうとしてくれるし、子どもたちの生活や、災害時の避難のことを考えた整備をしてくれた。『すぐやる係』というのもあって、『あそこのタイル剥がれてるよ』と連絡をすれば、当日に見に来て、翌日には修理が開始されている。

こんなふうに町の声を聞いてすぐに動いてくれる人たちがいたから、安心して暮らせる町になった。宇多津のいいところは、ちゃんと“応えてくれる”ところやね。」

と、嬉々とした様子でお話してくれました。

■目指せ半世紀! 世代を越えて親しまれる「笑顔の味」

かつて多くの商店でにぎわっていた通りも、時代の流れとともに姿を変えました。店を閉じる仲間も少なくなかった中で、「前田精肉店」は変わらず暖簾を掲げ続けています。

「スーパーができてたりして、買い物の形も変わってね。うちはオーリーブ牛だから、どうしても高くなってしまふ。だけど、普段はスーパーでお肉を買っていても、息子や娘、孫が帰って来る」となった時に、みんな買いに来てくれる。

孫が言うんだって。『おじいちゃんこ行こ! 本物のお肉が食べたい!』って(笑)
美味しさをわかってきてるみたい。
おじいちゃんおばあちゃんも、孫が来てくれるから嬉しい。もちろんお父さんお母さんも一緒に食べられる。
うちのお肉でみんなが笑顔になる。それが何より嬉しいね。

お店を始めて、今で48年かな。もうすぐ半世紀!」

にこやかに微笑みながらそう話す姿には、誇りも感じられます。

町の変化を見守りながら、地域とともに挑戦を続ける女将さんの言葉からは、宇多津という町に流れる“前を向いて生きる力”と、変わらない温かさを感じました。



前田精肉店の女将さん。優しい笑顔が、お店を訪れる人をホッとさせる。



揚げたてで提供される、旨味が溢れる名物コロッケは、1つ150円。お店の前で食べている人の美味しそうな様子を見て、「私もあれを」と買いに入店してくるお客さんもいたのが印象的だった。

<作品紹介>

山本基「時を紡ぐ」
歴史的建造物「倉の館 三角邸」の和室と茶室をキャンバスとして、塩を使って無数の泡や網目模様を描いた作品。

約75kgの塩を使い、網状や泡状パターンを細かな手作業で床いっぱいに描くことで、宇多津の浜辺の波紋や漁網、町の歴史・記憶、人のつながりを表現。
会期終了後には、鑑賞者と共に作品を壊し、使われた塩を海に還すという「海に還るプロジェクト」という取り組みも実施している。宇多津エリアにて、瀬戸内国際芸術祭2025の秋会期で展示された。

※画像：瀬戸内国際芸術祭2025出展作品／撮影：日本総陞
※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください



茶室の作品。静けさの中に、時間の流れや動きを感じさせる。



会場の一角には、作者の作品作りを体験できるコーナーが設けられていた。「ああ! 根気のいる作業!」と唸りながら挑戦する参加者の方も。



近づいて見ると、一面所一面所、丁寧に描かれたことが容易に想像できる精巧さに気づく。

<作品紹介>

シガリット・ランダウ「Capacity」
イスラエルとヨルダンの国境にある塩水湖「死海」の塩分を利用し、時間の経過とともに塩の結晶に覆われていく過程をとらえた作品。展示物は白く輝き、結晶化の過程を通じて「変容」「記憶」「環境」などをテーマとしている。結晶化した衣服が水の中で静かに佇む姿は、かつて塩づくりに生きた人々の営みや、時の流れの中で形を変えていく“記憶”を思わせる。宇多津エリアにて、瀬戸内国際芸術祭2025の秋会期で展示された。

※画像：瀬戸内国際芸術祭2025出展作品／撮影：日本総陞
※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください



左端は、漁網に塩の結晶を付着させたもの。繊維や太さに沿って大小さまざまな結晶が付き、白く美しいオブジェとなっている。塩の結晶は、包むものを選ばない。形を覆い、原型をとどめながらも、まったく新しい姿へと変えていく。ライトの明かりを受けて、白く輝く様子が印象的だった。